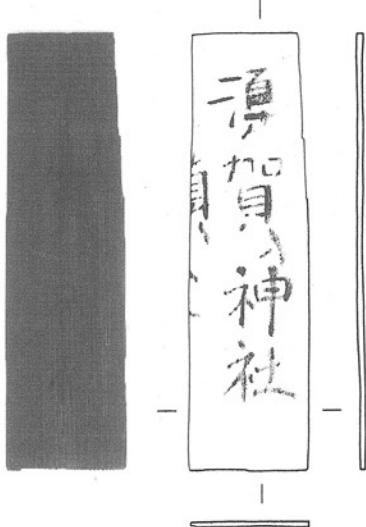




(1)



(2)

**ローマ木簡研究者実見記**

先日、オックスフォード大学のローマ木簡研究者の方々が奈良文化財研究所に来訪され、日本の木簡をお見せした。日英両国の木簡研究者間のコミュニケーションは、大阪大学の栗原麻子先生が確保してくださった。

彼らが対象としている、イギリス出土のローマ木簡は、木板に直接インクで文字を書くタイプである。板をつなげ、長い文書を書くこともある。

どういう用途なのか、何が書いてあるのか、という様なやりとりから始まり、出土地点の情報記録法、出土状況と内容の分析、といった「木簡マニア」の領域に話題が及び、ついに、木片はどういう加工するのか、文字がにじまないコーティングなどはないのか、といった話題に及んだとき、日英の意思伝達は現物を指しながらの身振り手振りが主流となるに至った。むろん、栗原先生に確認しながらではあるが。

文字や言語・時代が異なっていても、木簡を遺跡から取り上げ、観察し、訛読し、検討し、保存・公開する、という「木簡研究の方法」は共通している、と痛感した次第である。

(馬場 基)